

昔、禅智というお坊さんがいました。京都の近くの「池の尾」というところに住んでいました。禅智は池の尾でとても有名でした。鼻がとても大きくて長かったからです。口の下までありました。

禅智は、この鼻が大嫌いでした。もう五歳を過ぎていましたが、子どものときから、人が自分の鼻をどう思うか、ずっと心配でも、そのことを他の人に知られたくありませんでした。だから、他の人の前では心配していないような顔をしていました。

禅智が自分の鼻が大嫌いな理由の一つは、不便だったからです。

食事のとき、禅智は一人でご飯を食べることができません。茶碗の中に鼻が入ってしまうからです。禅智には弟子がいましたから、弟子に手伝ってもらいました。弟子というのは、勉強や仕事を先生から教えてもらう人のことです。食事の間は、弟子に板で鼻を持ち上げてもらいます。

あるとき、弟子がくしゃみをしたので、鼻が熱いご飯の中に落ちてしまいました。この話は池の尾だけではなく、京都でも有名になりました。

ページ見本



ページ見本



「ここは、山の中です。  
若い男が二人、歩いていきます。鉄砲を持って、白い大きな犬を二匹連れていきます。」

二人は、もう何時間も山の中を歩いていま  
一人が言いました。

「どうしてこの山には動物がないんだ？  
もう一人も言いました。」

「この鉄砲で、鹿をババーンと撃ちたいなあ。早く撃ちたいなあ。きっと楽しいだろうなあ」

二人は東京から来たのです。

一時間前まで、案内の人も一緒に歩いていたのですが、どこかへ行ってしまいました。

木がだんだん多くなってきました。木の葉がたくさん落ちていきます。

ページ見本

おじいさんは、そのそばに行きました。そこには、下の方がびかびか光っている竹がありました。

「中に何があるんだろう」

おじいさんは、その竹を切ってみました。すると……。

中に小さな女の子が座っていました。

「おお、かわいい女の子だ！」

おじいさんは、その女の子を家に連れて帰りました。おばあさんも、たいへん喜びました。二人には、子どもがいなかったからです。

おじいさんは言いました。

「今日からこの子は私たちの子だ。かぐや姫と呼ぼう」

かぐや姫というのは、びかびか光る女の子という意味です。

ページ見本



ページ見本